

町田市の概況

1. 位置・地形

町田市は、首都圏30～40km圏で、神奈川県と半島状に接しながら東京都南西部に位置しています。

町田市は、東京都の南端、関東山地の東麓に発し、三浦半島基部に達する（広域的な自然環境を形成する）多摩丘陵の基点に位置し、西方は関東山地へ続き、東・南方は相模台地へと緩やかに続いています。

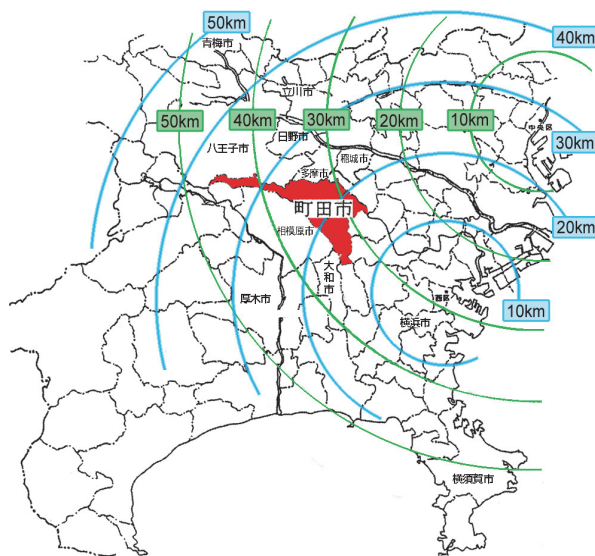
また、丘陵域に源流を有する鶴見川、恩田川、真光寺川などは、広域的な河川軸として相模湾や東京湾へそそぎ、市域においては低地や谷戸を刻み、町田市域の多摩丘陵の特徴的な風景を創出しています。

市内は、地形的には大きく丘陵部・台地部・低地部の3つのまとまりが見られ、最西端に位置する大地沢嶺（草戸山）の海拔364mから三輪団地東側の海拔27mまで、北高南低の起伏に富んだ地形となっています。

地質は主として表面5～15mの深さを関東ローム層におおわれています。

市面積	71.55km ²
広ぼう	東西・・・22.3km 南北・・・13.2km
海抜	最高・・・364m 最低・・・27m

町田市の位置



2. 沿革

多くの遺跡が発掘されていることから、町田市は、先土器時代から生活地としての長い歴史を持っています。

中世から近世までは鎌倉街道や神奈川街道（現 町田街道）などに沿って25ヶ村の集落が形成され、宿場としても栄えました。

江戸期には、養蚕や炭焼きなどが盛んになり、繭、木綿糸、生糸、織物、黒川炭などの地場物産は、原町田付近で開かれはじめた「二・六の市」で盛んに売り買いされるようになりました。

明治期になると、八王子から原町田を経て横浜に向う街道は、「絹の道（シルクロード）」とも呼ばれ、多くの商人が行き交い、様々な情報・物資が集まり、原町田付近では「二・六の市」が最盛期を迎え、今日の町田駅周辺の商業集積の礎が築かれていきました。自由民権思想などが「絹の道」を通じて伝えられ、活動が活発に行われたのもこの頃です。

こうした中で1893年（明26）には神奈川県から東京府へ移管され、交通面では、JR横浜線（1908年）、小田急線（1927年）が開通し、広域的な鉄道網が結節する優れた交通条件を有するようになります。

戦後は、町田駅周辺の商店街がいち早く復興し、人口も増加をはじめ、1958年（昭33）に町田町、鶴川村、忠生村、堺村が合併し、東京都第9番目の市制が人口6万人で施行され、町田市となりました。

その後、東急田園都市線の開通、東名高速道路の開通などを背景に、1960年代から1970年代にかけて住宅地開発が進み、新たな首都圏近郊の住宅都市としての発展を遂げてきました。

1980年代から1990年代にかけて、多摩ニュータウン事業としての土地区画整理事業や、三輪地区を始めとした民間組合方式による土地区画整理事業、町田駅周辺の中心市街地における再開発事業などが行われました。

2000年代からは、木曾山崎団地を始めとする既存の大規模団地の活用・再生の動きがスタートし、また、2010年代からは、南町田や鶴川の駅周辺における大規模なまちのリニューアルが始まりました。

3. 土地利用と人口の推移

町田市は、平坦部である原町田周辺に公共施設等をはじめ様々な都市機能が集積しており、一極集中型の都市構造となっています。商業施設は主に町田駅周辺及び幹線道路沿道に集積し、工業施設は市街地周辺に点在しています。

北部の丘陵地域では、宅地への転用が進んだものの、樹林、田畑等の自然的土地利用が比較的多く残っています。

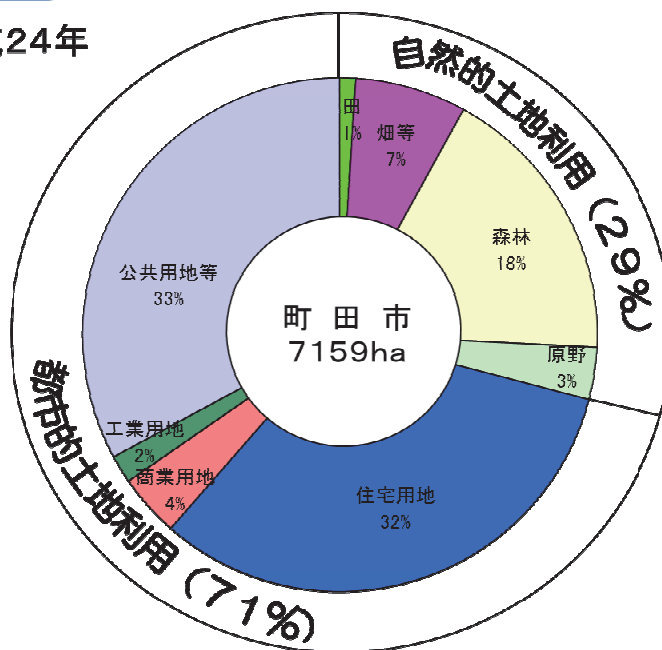
市全体の土地利用状況を見ると、2012年（平24）の都市計画基礎調査（土地利用現況調査）では、都市的土地利用が約7割を占め、中でも住宅用地が最も多く市域の32%を占めています。

一方、自然的土地利用の多くは森林で市域の18%を占め、水田が最も少なく市域の1%となっています。

土地利用の変遷を見ると、1960年（昭35）からの約40年間で農地、樹林等の約6割が減少しました。中でも水田は、1960年（昭35）の8割近くが減少しています。

都市計画基礎調査

平成24年



町田市の人口（外国人含む）は、2019年（平31）1月1日現在で、428,685人となり、多摩地域では2番目に多くなっています。

市制施行当時は約6万人だった人口は、大規模団地の建設や区画整理事業等の施行により1960年代から1970年代にかけて急激に増加しました。しかしながら、近年はその伸びは次第に緩やかになっており、2020年をピークに減少すると見込まれています。また、今後は確実に高齢化が進むものと予想されています。

人口の推移

